

## 多賀城市の文化財支援に参加して

小田原市教育委員会 塚田 順正

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による文化財等の被害は極めて広範囲で深刻であった。ここでは私が要請を受けて5月30日から6月4日まで参加した宮城県多賀城市の文化財被害と救援活動について報告する。

多賀城市は仙台市の北東側に隣接し、市域は仙台湾の後背地となっている。津波は市域の中央を流れる砂押川を遡上し、高さ2~4メートルで流域の約662ヘクタールが浸水し多くの死傷者を出した。浸水域には旧伊達家重臣の「天童家」やその家臣団ゆかりの八幡地区や近世の街道である「塩竈街道」沿いの民家の蔵など、この地域特有の歴史的建造物が多く残っており、これらが壊滅的被害を受けた。震災後、蔵の所有者からは市に対して解体の相談や、片付け中に発見された刀剣類の取り扱い、水没した文箱や文書のカビなど、損傷や処分についての相談が寄せられた。文化庁や県、NPOが連携して立ち上げた文化財レスキューではとても対応できず、市文化財課では市内にある県立東北歴史博物館と連携した取り組みを行うこととした。

まず市文化財課職員により4月1日から30日まで民家の蔵の被害現況調査を実施し、引き続き5月下旬から4週間にわたって板倉、石倉、土倉等の古文書等歴史資料、民俗資料の調査・保全を行った。これには太宰府市、三重県明和町、小田原市、国分寺市の文化財担当職員が1~2名加わり3~4班編成で現地活動をおこなった。その結果、189棟を確認し、被災した蔵

から救出した資料は数百点に及ぶ。これら資料は所有者が引き続き保管することを基本とし可能な限り現地で記録と乾燥や土砂の除去・洗浄作業を行った。現地での対応が困難なものは埋蔵文化財センターに持ち込み、今後の処理方法を検討することとした。

多賀城市の迅速な文化財救出活動に学ぶことは多い。紙数の関係から次の2点について記す。

事前の状況把握と所有者との信頼関係の不断の構築の重要性について。多賀城市では「歴史的風致維持向上計画」の策定作業を進めていた矢先であり、被災した蔵のある程度の現況把握と所有者との信頼関係が醸成されていた。このことが速やかに所有者との連携を可能にし「地域の文化財は地域で守る」ことができたと考える。困難な状況においても所有者の皆さんは私たちの活動に大変好意的かつ協力的であったことに感銘した次第である。

次に広域的支援のネットワークの必要性についてである。今回のように広範囲に甚大な被害が及んだ場合、従来の国、県、市町村という枠組みや、近隣自治体の連携などが十分な機能を果たせない。多賀城市の支援は、全市協（全国史跡整備市町村協議会）活動を通じ首長も文化財担当者も全国の市町村間に緊密な仲間意識を共有していたことが背景にある。こうしたネットワークの強化と運用を検討すべきである。

## セピア考古学雑記

このコーナーでは、神奈川県の考古学の土台を築いた方々の足跡をインタビュー形式で振り返ります。今回は川崎市在住の持田春吉先生にお話を伺いました。

### ——考古学との出会い、その後の経緯は？

小学5年生になると国史という科目があって、特に好きだったんです。それが邁進するきっかけだったのかな。

そして昭和23~24年頃、この土地の郷土史、考古学に興味を持ったものが何人かいて、会が生まれたんです。私は畑耕作をしつつ近辺の台地を踏査しました。主に宮前区・高津区内ですが、それが地名表のもとになったんです。地名表の前形作りをしてたわけですね。盆とかお節句だとか、そういう農家の休みの日に踏査をした。まだそんなに宅地造成が急じゃなかったのだから、発掘っていうのはなかった。だからそういう仕事からはじめたんです。それまでは遺跡地図なんかありませんから。「あの台地になにかあるか」というのを全部チェックしました。それから報告書などを端から集めまして、この土器は何時代のものだったのがある程度把握していました。

昭和30年には高津図書館友の会が発足したんです。大型の宅地造成が入ったのは30年、40年代から。宅地造成が始まると、マンションを建てたりで、谷が15メートルくらい削られました。開発が急になったんです。それで急に遺跡調査が出てきたんですね。で、30年に友の会に加入して、その中に事務所をおいたんです。図書館を中継して稼働していました。…津田山丘陵は開発が早かったですね。31年には津田山の丘陵の裏山のほうに東急の宅地造成の開発が入った。斜面に横穴古墳（津田山久地横穴墓群）が掘り込んであると、図書館に一報が入る。「穴が開いたから見に来てください」。で、ウチの会が飛んでいくの。当時は、発掘は威張ってできなかった。行政機能が厳しくなかった

から。だからブルの運転手に「グズグズしたら、埋めちゃわあ」なんて言われると「本当に申し訳ない…略測をするからもう少し待ってください」って拝み倒して、3日間くらいの緊急調査をやった。それが、発掘調査に入ったはじめて。その後、30年代には長尾権現台遺跡など、多くの遺跡を調査しました。川崎考古学研究所の設立は、昭和52年です。

### ——いちばん印象に残っている遺跡は？

鷺沼遺跡かなあ。鷺沼遺跡を私が確認、発見したのは兵役から復員した直後。斜面地を開墾してなんとか食糧をつくれっていう国策で私が開墾した畑の隣接地の山林が、鷺沼遺跡。完形に近い土器や石器がそこらじゅうに散らばってましたね。耕作されていないから残りが非常に良かった。だから、区画整理前は手をつけなくて、工事事務所に言っていたんだけど、西側と南側の斜面がブルドーザーで削られちゃったの。黒浜<sup>(註)</sup>の住居をね、3軒か4軒くらいぶっこわしたの。諸磯<sup>(註)</sup>の住居は6軒残ってた。黒浜は1軒だけ残っていた。昭和38年から調査をやり始めまして10日くらいやったんですけれどね。

他にもいろいろ思い出の遺跡があります。十三菩提遺跡は、集落の主体部を発掘もしないでつぶして県営住宅にしちゃったの。えらいことだって、お願いしたんですけどね。また、土橋第六天遺跡は非常に大きな遺跡ですよ。青森県の三内丸山遺跡のように非常に規模が大きな、また継続時期が長い遺跡なんです。でも天地返しで壊されちゃった。縄文中期から後期の土器片なんか山になっていて「全部捨てっちゃう」って。涙でてきちゃいましたね。

### ——半世紀ずっと考古学の世界をみてこられて、どのように思われますか？

あと10年もしたら川崎から遺跡なくなるんじゃないのかなあ。毎日のように遺跡を掘りますから。川崎もあと少し、宮前区はもう全部だねえ、高津区も半分くらいなくなっちゃいましたよね。20年も経つと麻生区も多摩区もなく

なっちゃうんじゃないのかな。その点、研究する者、学生にとってはかわいそうですよ。

——地元に着して学べた川崎考古学研究所みたいなのも少なくなってきましたよ、いますよね。

ええ。地元で埋蔵文化財はその土地に近いところにあったほうがいいってのが私の自論なんですけれどね。なにせ置く場所、展示場所がない。私も行政に言ったんですけどね。で、市民ミュージアムができたのが平成元年。はじめは歴史考古に限った建物って言うんですけど、無理だって。だからせめて考古に関するスペースは広げたほうが良いと何回も言ったんですが、残念です。「横浜市もそうだよ」って、横浜の人は泣いていたけれども、でも横浜市は立派な歴史博物館をちゃんとつくったからまだいいよねえ。川崎市も横浜に負けない資料があるんだけど。ですが私ももう年配なので、研究所は閉めました。ここの遺物などは全部、平成23年度中に市民ミュージアムに移管しました。24年の夏前頃、研究所の資料のテーマ展をミュージアムでやる予定にしているようです。膨大な量でしたからね。

——川崎考古学研究所で苦労した点、楽しかった思い出は？

調査は学生を使っていたから、人を集めるのが一番たいへんだったなあ。来ていた学生は全部住所や電話番号を控えてありましたから、それで連絡もした。「きてくんねえか」って。必ず来てくれる学生もいましたが、そうでない人も多かったですね。今はなおさらそうでしょうけど。楽しかったのは、遺跡を掘り上げたあと、ご苦労さん会をやるんです。その時は楽しかったですね。やり遂げたということで。学生がぶっ倒れて酔って寝てたり(笑)。でも楽しかったのはそれくらいで、あとは苦労の連続でしたね。掘っている最中は苦しかった。

——研究所で考古学に携わった学生は、どのような人たちだったんですか？

研究所にはいろんな大学生がいた。明治、法政、それから立正、早稲田、横浜国大、県内の大学ほとんど。でもね、それが必ずしも考古学を専攻しているやつじゃない。法学部に籍を置いて専攻しているやつも経済勉強してるやつらもここにきてから習得、一から学んだんですよ。女性も多かった。女の人は平板を丁寧にとるんだね。学生にはね、2年か3年になると、区域を担当させた。土器洗いから報告書書くのまで全部やりましたよ。

——先生にとって影響が大きかった人の思い出は？

塩野半十郎先生ですね。塩野先生もやはり、農家なんですよ。兵隊の時も一緒だったというのがあります。私は兵役のとき、国分寺に駐屯していたんです。その隣に塩野先生は住んでおられ、それで知り合った。うちに寝泊まりもしていました。農民考古学者っていう名称も、塩野先生から受け継いだんです。

——神奈川の考古学と若い人たちにメッセージをお願いします

県考古学会には言うことないけどねえ。考古学全体には、ちゃんとした調査をやってほしいってことかなあ。若い人には、…そうですね、一生懸命やってほしいということくらいですね。——ありがとうございました。

持田春吉(もちだはるきち)

大正14年橘樹郡(現川崎市)で誕生。川崎市立宮崎尋常小学校高等科卒業後、農業に従事。兵役から復員後、農業の傍ら考古学に勤しむ。昭和52年に川崎考古学研究所を開設し、閉所する平成23年まで運営。川崎市内の多くの遺跡発掘調査を行い川崎市の考古学の礎をつくった。「農民考古学者」。

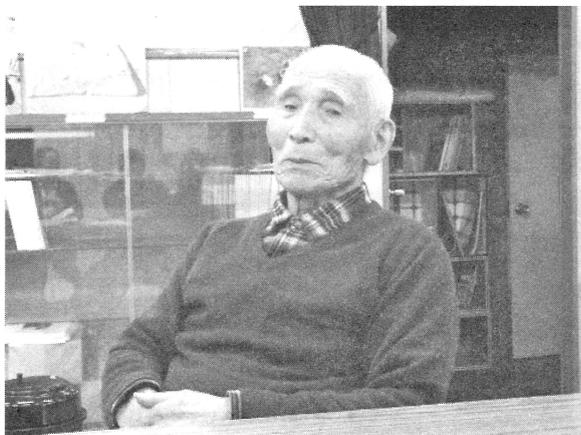
(インタビュー：平成23年12月23日、川崎考古学研究所にて担当役員の桑原・野口がお話をうかがった。文責：野口)

### \* 文中に出てきた主な遺跡と人名

- ・津田山久地（つだやまくじ）横穴墓群  
川崎市高津区久地及び下作延にある横穴墓群。11 基の横穴墓のうち 2 基が調査され、直刀・鉄鏃等とともに、円筒埴輪片が出土している。
- ・鷺沼（さぎぬま）遺跡  
川崎市宮前区鷺沼で発掘された縄文時代前期の遺跡。黒浜式期から諸磯式期の住居跡 7 軒が発見された。
- ・長尾権現台（ながおごんげんだい）遺跡  
川崎市宮前区五所塚及び多摩区長尾にある遺跡。縄文時代中期から後期の住居跡 4 軒が発見され、なかには、この時期では珍しい五角形の住居跡もある。
- ・十三菩提（じゅうさんぼだい）遺跡  
川崎市宮前区野川にある遺跡で、縄文時代前期末の標式遺跡として著名。その他にも、縄文時代早期から後期までの遺物が出土している。
- ・土橋第六天（つちはしだいろくてん）遺跡  
川崎市宮前区土橋にある縄文時代中期の遺跡。20 軒以上の住居跡が発見されている。
- ・塩野半十郎（しおのはんじゅうろう）  
1898-1984 農業の傍ら遺跡発掘調査に従事。特に多摩丘陵を中心とした発掘活動において中心的な役割を果たし、縄文時代研究に大きく貢献。

(注) 黒浜、諸磯：文中では「黒浜式土器型式」「諸磯式土器型式」を略している。ともに縄文時代前期の土器型式。

持田さんの足跡に関しては、持田春吉の歩み記念誌刊行会が 2010 年に発行した『農民考古学者 持田春吉—新聞報道でみる半世紀の歩み—』に詳しい。ぜひご一読ください。



## かながわの遺跡展「弥生時代のかながわ 移住者たちのムラと社会の変化」

見学会記

渡辺 節雄

見学会の参加者は、八十歳を超えられた方も含めて三十名以上と盛況でした。当考古学会は高齢者の生涯学習にも活かされていると感じました。皆さん向学心が旺盛で、いろいろと伊丹徹氏に質問されておられました。展示物を見て、アマチュアの勝手な夢想をここに述べることにします。

神崎遺跡を遺した人々は、数家族十数人が、飲み水や種籾の入った壺を携えて、西部劇の幌馬車隊の様に、舟をつらねてフロンティアを目指し、伊豆半島を海岸沿いに回り込み、相模湾の海辺に沿って東に進み、中小河川の河口を見付けては、そこを遡って新天地を探したのでしょうか。適切な場所に上陸して、太型蛤刃石斧で木を切り倒し、大型打製石器で堅穴や環濠を掘り、木製のすき・くわで土を耕したのでしょうか。

住環境として悪くない目久尻川を望む高台に住んでいたこれらの人々はその後何処にいったのでしょうか。さらなる新天地を求めて移動したのでしょうか？三遠地方に帰ったのでしょうか。昨年日本列島の様に自然災害にあって廃絶したのでしょうか。



## 海老名市河原口坊中遺跡見学の記

曾根 博明

10月15日午後に県考古学会の河原口坊中遺跡の見学会が行われた。

当日の朝は荒天で風雨強く、中止が危惧されるような天候であったが、見学会が始まる頃には時折晴れ間がみえる夏日となった。参加者は二十数名であったろうか。

かながわ考古学財団の池田治氏による弥生時代中・後期、古墳時代前期、古代・中世の土器や石器の説明を現場事務所でもしていただいた。そして発掘現場の見学となったが、ポンプで現場の雨水排水を急いで行っていただいたようで、複雑に重複した弥生時代の竪穴住居址群や井戸、旧河道などの遺構をわかりやすく見ることができた。現地は相模川に近い低地にあり遺跡は何度も氾濫にあったであろうことは、想像に難くないし、実際に掘り込まれていた地山・覆土も暗褐色で、私のような現場から離れて何年も経た者には、識別しにくい面倒な土の様に思えた。

中世から弥生時代中期まで遺構面が7面も重複しているという。繰り返し人々の生活が営まれ続けていたことになる。

48年前、私は地元中学校の生徒であった。今、思えば、家は史跡国分僧寺の一画にあった官舎で、そこで数年を過ごしたことになる。

学校の校庭には大きな鳥瞰図の看板があって、大山や丹沢、相模川や田畑の風景が描かれ、海老名耕地や古代条里跡・国分寺といった言葉も説明されていたように思う。

高台にあって眺望のよい中学校やその裏山「ひょうたんやま」の墳丘に登って西側を眺めると、当時は麦畑のかなたに、大山の山裾までに広がる田圃が眺められた。国分寺や古墳群など、古代相模の中心地海老名である。相模川が治水され、きっと古代海老名耕地も人々によって拓かれていたに違いないと漠然と想像していた。

河原口坊中遺跡の調査がそのことを明らか

にしてくれるだろうと期待をふくらましてくれる見学会であった。



## 大地の一页

県内で発見された遺構に焦点を当てて紹介する新コーナーです。初回となる今回は、この一年を通して、日本国内外を問わず誰もが意識せざるを得なかった「地震」をキーワードにいくつかの遺構を取り上げます。

### 地震のしくみ

地震は地下の断層運動によって発生します。断層とは、地層や岩石が上下または左右にずれている部分のことをいい、第四紀以降(約 200 万年前から現在まで)に繰り返し活動している断層を特に、活断層といいます[科学技術庁 2000]。

神奈川県は変化に富んだ地形が示すとおり、関東地方の中でも活断層の密度が高い地域で、最も活発な神縄・国府津一松田断層帯のほか、伊勢原断層、三浦半島断層群、秦野断層、渋沢断層などが分布しています[神奈川県 2011]。県内各地の発掘調査現場では、これまでも数多くの地震の痕跡が確認されています。

遺跡の中で見つかった地震痕跡は、過去に起きた地震の規模や震源、揺れの性質といった地震学の知見だけではなく、前後の層序を観察することでより細かく地震発生の時期を推定できる場合があります。また、地震がおきた当時の人々の暮らしに与えた影響—家屋や構造物への被害状況—やその後の人々の行動—居住地の移転や修復—についても詳らかにすることが可能になります。

考古学と地震学双方の視点から地震痕跡を研究する分野を「地震考古学」といいます[寒川 1988]。提唱者であり研究の主導者であるの寒川旭氏は全国の地震痕跡の記録と分析を試みており[寒川 1990 他]、その成果は多くの著作で紹介されています。神奈川県では、上本進二氏が中心となって県内各地の地震痕跡の事例収集と分析が進められています[上本 1989 他]。

こうした研究の蓄積によって、過去の地震の実態が一層明らかになってきています。

### 発掘調査で確認される地震の爪あと

発掘調査で確認できる地震の痕跡には以下のようなものがあげられます。

#### ① 流動化現象

地下水を多く含む層や粒子の細かい砂礫層は、地震動によって水圧があがり、土層が液体のように流動的な動きをする場合があります。粒子の細かい砂礫は地層の脆弱な部分を縫って地上へと噴きあがります。発掘調査では、下層から砂脈が亀裂のように伸びていたり(図 1)、地層の一部が乱れて噴水のように上層へ噴きあがっているような状況が断面で観察されます。地震発生時の地表面が削平されずに残存している場合には、平面的に噴出した砂層の広がりを観察できる場合もあります。水圧によって砂礫が押し上げられる運動であるため、噴砂を形成する砂層は観察地点によって砂礫の構成や粒子の大きさが異なることに注意が必要です。同様の状況が火山砕屑物(軽石層)において生じたものをパミスダイクといいます。

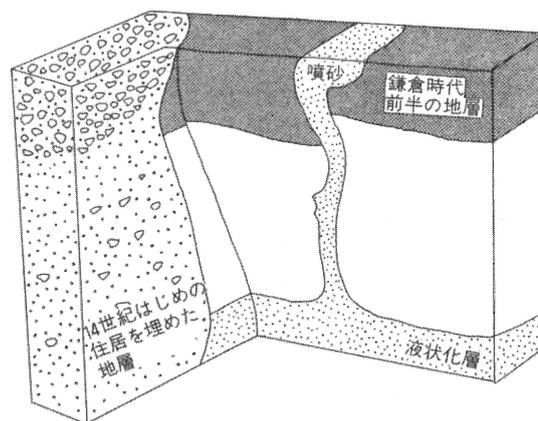


図1 鎌倉市長谷小路周辺遺跡群の液状化模式図  
[寒川 1997]図40より引用

#### ② 地面の食い違い(断層)と地割れ

地層が食い違っている様相は、断面でよく観察されます。図 2 であげた二伝寺(藤沢市 No.215) 砦遺跡の調査では、弥生時代後期を主体とする集落に南北方向に何本もの地割れと小断層とが確認されています。

図 2 中央の隅丸長方形の 16 号住は、南北に走る 3 本の地割れによって大きく破壊されています。当時の床面である 2 層(断面図中網掛け部分)は、小断層や地割れなどの影響が著しいこと

がわかります。この住居は、地震で破損した床面を部分的に補修して、その上に新たに貼床(1層)をしています。被災後も住居を補修した上で同じ場所に住み続けた例として注目されます。

私たちの祖先は、様々な自然の脅威に晒されながらもこの地で営みを繰り返してきました。大地には、過去の人びとの生活の痕跡とともに、その時々人びとを襲ったさまざまな災害の爪痕もまたひそやかに眠っています。そして、当時の被災者たちの選択、復興への歩みもまた大地に刻まれているのです。(文責: 桑原)

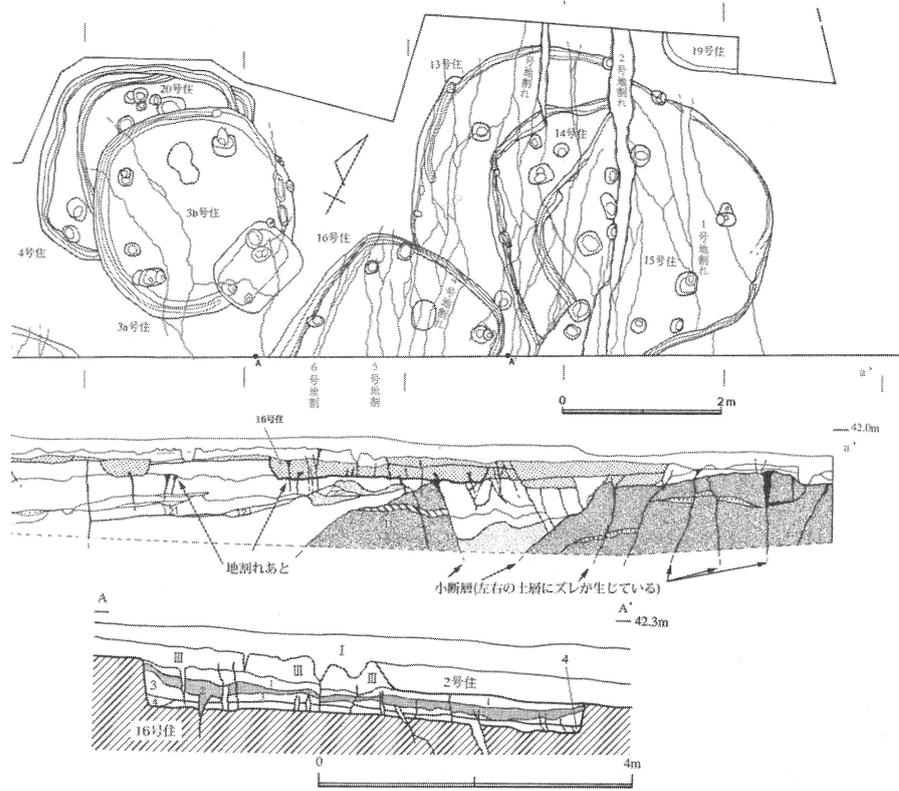


図2 二伝寺(藤沢市No.215)岩遺跡 16号住周辺から検出された地震痕跡(小断層と地割れ)  
〔東国歴史考古学研究所 1999年第55号・38図を参考に一部改変、合成〕

参考引用文献一覧

太田陽子・島崎邦彦(編)1995『古地震を探る』古今書院  
 上本進二 1989「南関東のテフラ層における波状帯の形成」『考古学と自然科学』21 (Pp.73-84)  
 上本進二 1992「付編2 向原遺跡における断層・地すべり・パミスダイクと遺跡形成」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 25 向原遺跡II』(Pp.157-160)  
 上本進二・桜井準也・小澤かおる 1992「(2)地割れの分布と特徴」『慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス内遺跡』第1巻  
 上本進二「(5)遺跡内の地形発達」(Pp.277-283)『上掲報告書』  
 上本進二「第3節 弥生時代～近世・近代 (18) 古墳時代前期から中期(約1600年前)の相模湾岸を襲った大地震と社会的影響」(Pp.1001-1007)『上掲報告書』  
 上本進二・上杉陽・桜井準也 1994「南鍛冶山遺跡のテフラ層とパミスダイクー東京パミスと三浦パミスの液化化跡と古墳時代前期～中期頃の地すべり」『南鍛冶山遺跡』  
 上本進二・上杉陽 1996「神奈川県中部伊勢原断層周辺の地震痕跡と古地震」『日本文化財科学会』第13大会研究発表要旨集 (Pp.22-23)  
 上本進二 2007「III-1 水尻遺跡検出の低角逆位断層について」『水尻遺跡』(Pp.65-67)寒川旭 1988「地震考古学の提唱」『日本文化財科学会会報』16 (Pp.19-26)

科学技術庁 2000『日本の地震防災 活断層』  
 勝又護 1995『地震を知る事典』東京堂出版  
 神成松遺跡発掘調査団 1995『神奈川県伊勢原市神成松遺跡発掘調査報告書』  
 寒川旭 1990「遺跡から得られた過去の地震情報」『地学雑誌』99-5 (Pp.51-62)  
 寒川旭 2001「遺跡で検出された地震痕跡による古地震研究の成果」『活断層・古地震研究報告』No.1 (Pp.287-300)  
 寒川旭 1992『地震考古学』中公新書 中央公論社  
 寒川旭 1994「8.地震考古学の誕生」『発掘を科学する』岩波新書(Pp.123-140)  
 寒川旭 2007『地震の日本史—大地は何を語るのか』中公新書 中央公論社  
 寒川旭 2010『秀吉を襲った大地震』平凡社新書 平凡社  
 島崎邦彦・松田時彦(編) 1994『地震と断層』東京大学出版会  
 田中琢 1993「6.地震を発掘する」『考古学の散歩道』岩波新書(Pp.134-140)  
 神奈川県 HP「神奈川県の活断層」(2011/3/1 更新)http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5152/

## ～平成 23 年度神奈川県考古学会講座「災害と考古学」のご案内～

近年、私たちの環境は大きく変わってきています。次々と発生する大規模な自然災害に驚愕を感じざるを得ません。

歴史の文献を紐解くと災害に関する記述が見られ、当時の人々の動向や感情が生々しく書かれており、あらためて人間も自然の一部であることを感じます。

今回の講座では、発掘調査などフィールドで見られる災害の痕跡はどのように見られるのか。また、考古学に関わる私たちが災害時に何ができるのかについて考えてみたいと思います。

日 時 平成 24 年 3 月 4 日 (日)

午前 10 時から午後 4 時 35 分まで (受付開始 : 9 時 30 分)

場 所 横浜市歴史博物館 講堂

(横浜市都筑区中川中央 1-18-1 Tel.045-912-7777

横浜市営地下鉄線「センター北駅」より徒歩 5 分)

| 内 容                 | 講 師    |
|---------------------|--------|
| 講座 1 総論             | 上本進二 氏 |
| 講座 2 「茅ヶ崎市に見る災害痕跡」  | 大村浩司 氏 |
| 講座 3 「藤沢市に見る災害痕跡」   | 西野吉論 氏 |
| 講座 4 「神奈川県内に見る災害痕跡」 | 天野賢一 氏 |
| 講座 5 「博物館と自然災害」     | 山本哲也 氏 |

\*\*\* みなさま、ふるってご参加ください! \*\*\*

### ●編集後記

昨年発生した東日本大震災は、私たちにとって、大きな衝撃でした。津波が町をのみ込む、恐ろしいテレビの映像は今でも鮮明に覚えています。「神奈川県考古学会にできることは、なんだろう？」役員会で話し合わせ、3月4日に行われる考古学講座での「災害と考古学」のテーマが決まりました。『考古かながわ』でも前号は中田英さんに阪神淡路大震災の際の文化財対応について、今号では塚田順正さんに、東日本大震災の際の文化財対応についてご執筆いただき、また、今号開始の「大地の一頁」でも「地震」をテーマにさせていただきました。

東日本大震災により亡くなられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々、ご家族、ご親戚の方々に心よりお見舞い申し上げます。

### ●会誌等に残部あり!

会誌『考古論叢かながわ』2～19集、考古学講座発表要旨、神奈川県遺跡調査研究発表会要旨に、残部がございます。会員の方でご入り用の方は、下記住所もしくはメールアドレスまでご連絡ください。

#### 考古かながわ 第 47 号

発行 神奈川県考古学会  
 発行日 2012年2月29日  
 編集 野口浩史・桑原安須美・高橋 和 (連絡誌担当)  
 印刷 (有)湘南グッド  
 発行者 神奈川県考古学会 会長 岡本孝之  
 〒252-8520 藤沢市遠藤 5322  
 慶應大学 岡本孝之研究室 気付  
 郵便振替 00240-9-71208  
 e-mail [soumu@koukokanagawa.net](mailto:soumu@koukokanagawa.net)